

エステル記

2章

エステル記 2章の背景

1,これらの出来事の後、クセルクセス王の憤りが収まると、王はワシュティのこと、彼女のしたこと、彼女について決められたことを思い出した。

当時の一大帝国ペルシャの王クセルクセスが対ギリシャ戦の謀議のために開いた宴会の終盤で、王妃ワシュティを高官の前に呼び出そうとしたが、それを頑なに拒んだワシュティが王妃の座を追われてしまう。その後クセルクセス王率いるペルシャ軍は陸上での戦いでは辛くも勝利するが、海戦では大敗を喫し、失意の王は自分の国に帰ってきた。

その時思い出したのは美人王妃ワシュティ、そして酒の席で、「ワシュティはクセルクセス王の前には出てはならない、という勅令をご自分でお出しになり、ペルシアとメディアの法令の中に書き入れて、変更することのないように」してしまったことだ。

侍従たちの忖度と王の反応

2,王に仕える侍従たちは言った。「王のために容姿の美しい未婚の娘たちを探しましょう。」

3,王は王国のすべての州に役人を任命し、容姿の美しい未婚の娘たちをみな、スサの城の後宮に集めて、女たちの監督官である王の宦官ヘガイの管理のもとに置き、化粧品を彼女たちに与えるようにしてください。

4,そして、王のお心にかなう娘を、ワシュティの代わりに王妃としてください。」このことは王の心にかなったので、彼はそのようにした。

「王に仕える侍従たち」とは、「王に仕える若い者たち」という意味もあるそうだ。長老格の大臣の提案ではなかったようだ。若者たちの王に対する忖度は、落ち込んでいる王様のため、見目麗しかったワシュティに負けないような美しい若い女性を全国ネットで集めて、王様のハーレムに呼び寄せ、更に美しさに磨きをかけるために化粧品を提供して、その中から王様のお気に入りを選んで、ワシュティの後釜にしてくださいと言うお願いだ。実に若者らしい提案！

「王の宦官ヘガイ」は、女たちの監督官であった。大奥総取締役みたいな人物。

そして、王様はそのアイデアが気に入って、その通りにした。1章でもそうであったが、王様はかなり、軽くお取り巻きの言いなりになっている。あるいは、お取り巻きが王様の意向をしっかりと忖度していたのかもしれない。

モルデカイ登場

5,スサの城に一人のユダヤ人がいて、その名をモルデカイといった。この人はヤイルの子で、ヤイルはシムイの子、シムイはベニヤミン人キシユの子であった。

6,このキシュは、ユダの王エコンヤと一緒に捕らえ移された捕囚の民とともに、エルサレムから捕らえ移された者であった。エコンヤはバビロンの王ネブカドネツアルが捕らえ移したのであった。

モルデカイはユダヤ人。ベニヤミン族で、南のユダ王国が滅びる少し手前のエコンヤ王(エホヤキン王)の時のバビロン捕囚の際、モルデカイの3代前の祖先でエルサレムにいたキシュが捕らえ移されたことがわかる。ペルシャのダリヨス王の時に帰還してもよいことになっていたはずだが、この一家はエルサレムに戻ることはせず、ディアスポラの生活を続けていた。ベニヤミン族と言うことは、イスラエル部族の中でも最も小さい部族であった。その小さきものを神がお選びになった…神の摂理！

エステル登場

7,モルデカイはおじの娘ハダサ、すなわちエステルを養育していた。彼女には父も母もいなかったからである。この娘は。モルデカイは、彼女の父と母が死んだとき、彼女を引き取って自分の娘としていた。

モルデカイとエステルは元々親戚関係。モルデカイのおじのアビハイルの娘がエステル(ペルシャ語の名前)で、ヘブル語の名前がハダサ。モルデカイにとってエステルは従妹にあたる。ハダサというのはミルトスと言う意味で、エステルは星という意味があるそうだ。ペルシャと言う外国に住んでいたこともあるが、やはりユダヤ人への迫害を避けるために、ペルシャの名前を使っていたんじゃないかと思われる。

エステルの父つまりモルデカイの伯父もその妻もなくなってしまう、その時にモルデカイはエステルを養女にした。養女にしたということは、父と子ぐらいの年の差があったのであろう。ネットサーフィンのチョイかじりの情報だと、2章11節で、モルデカイが後宮の庭の前をうろちよろできたことが書かれているので、モルデカイが宦官であったからではないか？ということだった。もしそれが本当なら、モルデカイに実子はいなかったわけだから、養女を得たのも理解できる。

ところで、エステルには両親がいなかったのだから、とてもかわいそうな境遇だった。そのような悲惨な境遇であっても、卑屈になっていないエステルがいた。

エステルは「姿も美しく、顔だちも良かった」とあるが、つまりスタイルがよく美人だったこと。しかし、エステル記全体を見ると、エステルが外面的だけでなく、内面的な霊的な美しさも備えていたことがわかる。

おきさき様候補に

8,王の命令、すなわちその法令が伝えられて、多くの娘たちがスサの城に集められ、ヘガイの管理のもとに置かれたとき、エステルも王宮に連れて行かれて、女たちの監督官ヘガイの管理のもとに置かれた。

先の若者の提案は法令となったことがわかる。実際に多くの娘たちが王様のいるス

サの城に集められ、大奥総取締役のヘガイの管理下に置かれた。「エステルも王宮に連れて行かれて」とあるので、エステル自身が志願したのではなさそう。どうも王様の命令で、若くて美人の女の子たちが引っ張られて行ったって感じ。こういうのを名譽なことと思えたかどうか??? 下心のある娘もいたのかもしれないけれど、少なくともエステルは自分で志願したのではなさそうだ。

9,この娘はヘガイの目にかない、彼の好意を得た。彼は急いで化粧品とごちそうを彼女に与え、また王宮から選ばれた七人の侍女を彼女に付けた。また、ヘガイは彼女とその侍女たちを、後宮の最も良いところに移した。

「この娘はヘガイの目にかない、彼の好意を得た」とあるが、別にヘガイがエステルに良くしてあげるゆわれはないはずだ。聖書の中でこのようなくだりが出てくる時は、ほぼ神の摂理・采配であることに違いない(ぱっと思いつくのはヤコブの息子のヨセフとかダニエルとかネヘミヤとか)。

ヘガイが具体的にどのようにエステルを取り扱ったかと言うと・・・「急いで化粧品とごちそうを彼女に与え」とあるように、エステルが少しでも早く顔も美しくなり、体も美しくなることができるように、必要な化粧品と美しいからだを得ることができるごちそうを用意して助けたことが分かる。

「王宮から選ばれた七人の侍女を彼女に付けた」と、7という完全数の侍女がエステルにつけられた。他の娘にはそれほどたくさんの侍女がいなかったのかもしれないし、「王宮から選ばれた」侍女ではなかったのかもしれない。

また、「彼女とその侍女たちを、後宮の最も良いところに移した」と、エステル自身が後宮の最も良いところに移されただけでなく、神の恵みを受けているエステルのそばにいた侍女も、エステルといっしょにいるというだけで、神の恵みのおこぼれを受けるといふ、この聖書の原則を見ることができる。最も良いところがどのような所なのかはわからないが、おそらくこの世的な基準で考えてよい所であったのであろう。

10,エステルは自分の民族も、自分の生まれも明かさなかった。モルデカイが、明かしてはいけないと彼女に命じておいたからである。

エステルが伯父(養父)モルデカイの言いつけを良く守る子であったことが分かる。このため、エステルは自分がユダヤ人であるという出自・自分がみなし子であることを秘密にしていた。先にも言及したが、ユダヤ人が既に差別や不当な扱いを受けていたことが分かる。

11,モルデカイは毎日、後宮の庭の前を行き来し、エステルの安否と、彼女がどうされるかを知ろうとしていた。

王の命令だからということで、連れ去られてしまった養女エステルのことを心配するモルデカイ。モルデカイが「後宮の庭の前を行き来し」ていたと書かれているので、後宮の庭にアクセスして問題がなかったのだから、モルデカイ自身が政府の中である程度の地位にあったのではなかろうか。先にも書いたが、モルデカイが宦官だったので

は？という噂もある。

お妃になる準備

12.娘たちは、女たちの規則にしたがって、十二か月の期間が終わった後、一人ずつ順番にクセルクセス王のところに入って行くことになっていた。準備の期間は、六か月は没薬の香油を、次の六か月は香料と女たちのための化粧品を用いて化粧することで、完了するのであった。

後宮では、「女たちの規則」があった。ペルシャはかなりルール好きだったようだ。準備期間は1年間。最初の半年は没薬の香油。没薬は保存料(埋葬の時とかミイラを作る時)だったはず。次の六か月は香料と化粧品。いずれにしても、念入りな匂い管理。そして、この準備期間が終わった女性は順番に王様の所に入っていった。王様は集められた女性を全員お試しすることになっていたようだ。

13.このようにして、娘が王のところに入って行くとき、その娘の願うものはみな与えられ、それを携えて後宮から王宮に行くことができた。

王様への夜伽の時に、娘は好きなものを持って行けるって？王様に対して自分をよく見せることができるグッズってこと？服や装飾品、その他王様への贈り物とか、お食事とか？最初は無理やり連れてこられたのかもしれないけれど(いや名誉なことだったのかな？でもどうしても金正恩の「喜び組」のメンバーのイメージがあります)ここまで来たら、王様の心を射止めるのに専念する子がいたんでしょうね。もし、王様のお気に入りになれば、次の節にあるように、第二の後宮で一生飼育殺し状態になるわけだから、娘たちも必死だったかもしれない。しかし、エステルはこうした物質的なことを気にする子ではなかった。

14.娘は夕方入って行き、朝になると第二の後宮に帰ることになっていた。そこは、側女たちの監督官である、王の宦官シャアシュガズの管理のもとにあった。その女は、王が気に入って指名されるのでなければ、二度と王のところには行けなかった。

エステルは準備係のヘガイには気に入られていたが、王宮側の側女(そばめ)の監督官は王の宦官のシャアシュガズという別の監督官がいた。その人に気に入られるという保証はなかったので、エステルは新しい世界に行かなくてはならない。

もし、王様に気に入られなかったら、残酷な運命が待ち構えていたようだ。一旦夜伽をしてしまうと第二の後宮に居なければならぬ。しかも王様に気に入られなかったら、一回で使い捨てるの可能性もあった。

15.さて、モルデカイが引き取って自分の娘とした、彼のおじアビハイルの娘エステルが、王のところに入って行く順番が来たとき、彼女は女たちの監督官である、王の宦官ヘガイの勧めたもののほかは、何一つ求めなかった。こうしてエステルは、彼女を見るすべての者から好意を受けていた。

とうとうエステルが夜伽をする番になってしまった。「モルデカイが引き取って自分の

娘とした、彼のおじアビハイルの娘エステル」ともう一度エステルの出自がはっきり書かれている。エステルの特長としては、何か物質的な物で王の気を引こうとするタイプではなかった。自分の目上の人である女たちの監督官であり、王の宦官ヘガイの勧めたもので満足した。そのような慎み深さにより「彼女を見るすべての者から好意を受けていた」とあるが、「すべて」というのは、すごいことである。これも神の導きを感じざるを得ない。王に反抗的だったワシュティとは大違い。ワシュティに同情できないことはないけれど(かなり破廉恥な理由で、男性の性的な視線にさらされなくてはならないので断ったのであろう)。しかし、神からの知恵があれば、ワシュティも廃位の憂き目を見なくてもよいような対処ができたかもしれない。もちろん神がエステルを選んでおられたのであるが、文化的にも女性が男性に従うことが求められていたペルシャの社会で、エステルは品性のある女性として人間的にもペルシャ王の側近から好意を受けることができていたのであろう。エステルは神に対して従順な生活ができていたのではなかろうか。だから神の器になれたのでは？

16.エステルが王宮のクセルクセス王のもとに召し入れられたのは、王の治世の第七年の第十の月、すなわちテベテの月であった。

先の王妃ワシュティが退けられたのは王の治世の第三年というか、宴会に一年近くをにかけていたので、王の治世の第四年ぐらいなので、あれから3年が経っている。エステルの準備に1年かかったわけだから、クセルクセス王は2年近く戦争に行っていたことが分かる。

結果

17.王はほかのどの女よりもエステルを愛した。このため、彼女はどの娘たちよりも王の好意と寵愛を受けた。王は王冠を彼女の頭に置き、ワシュティの代わりに彼女を王妃とした。

エステルの品性、慎み深さ、従う心、外面・内面両方の美しさにクセルクセス王の心が動いたのであろう。エステルは娘たちの中で一番王に気に入られることとなり、ワシュティの代わりに王妃になった。この国では嫌われ者のユダヤ人の小娘が超大国の王妃に昇り詰めることができたのは、神の摂理以外の何物でもないはず。王妃とは王の第一夫人のこと。エステルは側女から第一夫人にランクアップ。

18.それから、王はすべての首長と家臣たちのために大宴会、すなわちエステルの宴会を催した。諸州には免税を布告し、王にふさわしい贈り物を配った。

この人たちは宴会がお好きのようで…。エステルが王妃になったことを祝っての宴会のようであった。まあ結婚式というか、お披露目式と言うか。「すべての首長と家臣たちのために大宴会」とあるので、1章での宴会ほどではなかったにせよ、かなりの規模の宴会が開かれたらしい。さらに、ご祝儀代わりに免税になり、王様はその権威と威厳にふさわしい贈り物を諸州に届けた。

19,娘たちが二度目に集められたとき、モルデカイは王の門のところに座っていた。

この後また娘たちが集められて、次のグループの女性が後宮に入る準備を始めたようだ。せっかく王の寵愛を受けたとしても、また新人が入って来たらエステルも危なくなってしまうかも。とにかく、モルデカイは「王の門のところに座っていた」というので、何か行政関係の仕事をしていいたい。

20,エステルは、モルデカイが彼女に命じていたように、自分の生まれも自分の民族も明かしていなかった。エステルはモルデカイに養育されていたときと同じように、彼の命令に従っていた。

王妃になってもエステルは、養父の言いつけを守り続けた。従順な子だ。王妃になって偉くなったら、プライドや欲が出てくるかもしれない。しかし、そうはならず謙遜でいれたことはすごいことだ。しかも、養父のモルデカイのことも話してはいなかった。

謀反に気づくモルデカイ

21,そのころ、モルデカイが王の門のところに座っていると、入り口を守っていた王の二人の宦官ビッグタンとテレシュが怒って、クセルクセス王を手にかけてようとしていた。

22,このことがモルデカイの知るところとなり、彼はこれを王妃エステルに知らせた。エステルはこれをモルデカイの名で王に告げた。

モルデカイが行政関係の仕事をする中で、特に彼は門の所にいたので、入口を守っていた王の宦官のビッグタンとテレシュがクセルクセス王に腹を立て、暗殺計画をしていたことに気づく。モルデカイ自身、かなり有能な人物であったのだろう。あちこちうろして、諜報活動のようなことをするのも上手だったようだ。支配者である王に対して忠実な人であった。で、すかさずモルデカイは養女エステルの夫の危機をエステルに知らせ、エステルはモルデカイの名で王に知らせた。このことは、後に起こることの伏線になる重要事件！しかし、この時もエステルは、モルデカイが自分の養父であることを黙っていた。モルデカイも自分の手柄を大騒ぎするような人ではなかったようだ。

23,このことが追及され、その事実が明らかになったので、彼ら二人は木にかけられた。このことは王の前で年代記に記録された。

モルデカイのタレコミを基に調査が行われ、果たして暗殺計画が事実であったことが判明し、首謀者の二人は処刑され(この時代も木に掛けることで処刑したようだが、十字架とは違うようだ)、そして、大事なのは、「王の前で年代記に記録」されたこと。この記録が後で、訳に立つのだが、この時点ではまだ誰も知らない。聖書には書かれていないが、このような謀反が起きたことさえも、神のご計画に盛り込み済みであったことを思う時、神の壮大なご計画に、ひれ伏すばかり。すぐに報いがなくても、神はご存知であり、いつしかそれを個人的、あるいは国家的な益にしてくださる方であることに思いをはせることができる。